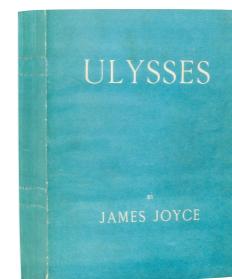


# 2022年の『ユリシーズ』－スティーヴンズの読書会

## 第7回 「アイオロス」 (2020.8.23)

### 【読書会参加に当たってのお願い】

- ・13:00から13:25まではZoom操作の練習時間とします。音声や映像、Zoom機能に関連して試してみたいことがあれば、ホストにお伝え下さい。
- ・途中参加・途中退出OKです。
- ・Zoomに接続できなくなるなどのトラブルが生じた場合、南谷のtwitterアカウントのDMか、[workshop.stephens@gmail.com](mailto:workshop.stephens@gmail.com)までご連絡下さい。
- ・画面のスクリーン・ショット撮影について
- ・読書会中、音声環境をよくするため、ホスト側で皆様の音声をミュートにさせてもらうことがあります。
- ・スライド中で柳瀬尚紀訳『ユリシーズ』（河出書房新社）を引用するにあたっては、「U-Y 挿話番号.ページ数」で表記します。



# 2022年の『ユリシーズ』－スティーヴンズの読書会

## 第7回 「アイオロス」 (2020.8.23)

13:00-13:30	準備：Zoomの練習・操作案内
13:30-13:40	ご挨拶
13:40-14:40	第1部：風を起こす（主催者発表）
14:40-15:00	休憩
15:00-16:00	第2部：風を集める（読者参加型ディスカッション）
16:00-16:10	休憩
16:10-17:10	第3部：嵐を呼ぶ（読者参加型ディスカッション）
17:10-17:30	ご挨拶・次回読書会について
17:30 ~	オンライン懇親会

# 『2022年のユリシーズ』 読書会予定表

第1回 2019年6月16日	第4挿話 カリュプソー	Book II. Odyssey	initial style
第2回 2019年8月25日	第1挿話 テレマコス	Book I. Telemachia	initial style
第3回 2019年10月20日	第2挿話 ネストール	Book I. Telemachia	initial style
第4回 2019年12月22日	第3挿話 プロテウス	Book I. Telemachia	initial style
第5回 2020年2月9日	第5挿話 食蓮人たち	Book II. Odyssey	initial style
特別回 2020年4月26日	特別回 第1挿話～第5挿話	Book II. Odyssey	initial style
第6回 2020年6月28日	第6挿話 ハデス	Book II. Odyssey	initial style
第7回 2020年8月23日	第7挿話 アイオロス	Book II. Odyssey	initial style
第8回 2020年10月	第8挿話 ライストリュゴネス族	Book II. Odyssey	initial style
第9回 2020年12月	第9挿話 スキュレとカリュブディス	Book II. Odyssey	initial style
第10回 2021年2月	第10挿話 さまよう岩々	Book II. Odyssey	initial style
第11回 2021年4月	第11挿話 セイレーン	Book II. Odyssey	
第12回 2021年6月	第12挿話 キュクロプス	Book II. Odyssey	
第13回 2021年8月	第13挿話 ナウシカア	Book II. Odyssey	
第14回 2021年10月	第14挿話 太陽神の牛	Book II. Odyssey	
第15回 2021年12月	第15挿話 キルケ	Book III. Nostos	
第16回 2022年2月	第16挿話 エウマイオス	Book III. Nostos	
第17回 2022年4月	第17挿話 イタケ	Book III. Nostos	
第18回 2022年6月16日	第18挿話 ペネロペイア	Book III. Nostos	

# 『ユリシーズ』を読むための6つの方法

(1) 意味と「？」を集める蜜蜂になる

(2) 「小さな一つ」に情熱を注ぐ

(3) 寄り道をしながら誰かと読む

(4) 一介の生活者として読む

(5) ダブリン行きを楽しみにする

(6) すべてが繋がっている驚異に出遭う

► 『ユリシーズ』は、普通の人々が毎日送っている生活の現実を祝福するために書かれた。ボーデールからフローベールに至るまで、前世紀の最も力強い作品は、単に陳腐になってしまう都市の日課の反復性に対する著述家の公然たる抵抗が動機となって、日常生活への辛辣な批評を含んでいることが多い . . . ジョイスは全く異なる方法を取った。**たった一日の詳細を記録することで、平凡な生活に潜む驚異的な要素を解き放つことができ、ありふれたものが驚嘆すべきものになると信じていたのである。**（デクラン・カイバード『ユリシーズと我ら——日常生活の芸術』坂内太訳（水声社、2011年、24頁）

# 第1挿話

テーマ 登場人物 関連事項

人物のあだ名

「キンチ」・「耶蘇会の怖い先生」(fearful Jesuit)  
「べらばうなイエズス会士」／「サクソン公」・  
「イギリス野郎」／「気動きマラキ」；マリガンのみは、「パック・マリガン」と呼ばれる。

地名・場所の名前

ブラック港／キングズタウン（ダン・レアリー）の港／ダブリン湾／五尋潟／サンディコーヴ／マグリン小島／ブレイヘッドのずんぐり岬／ダンドラム／マーター・リッチモンド病院／シップ酒場...

ポケットの中身

S：ハンカチ、2ペンス、大きな鍵  
M：1フロリン銀貨  
H：銀の煙草入れ、ニッケルのライター

マーテ口塔について

マリガンとスティーヴンの関係

マーテ口塔（塔の上と塔の中）

スティーヴンの母の死

宗主国と植民地

男たちの朝食

起床後の行動→朝食→海水浴という3部構造を中心に形作られている。

[?] MはSの対比的な性格として描かれている。Mは力関係としてSの上。Sを先輩として牽引する存在？

[?] 椅子2脚にはMとHが、Sは旅行かばんに座っている。3者の権力関係の象徴？単に寄宿人に譲っているだけ？

[?] マリガンはなぜ信仰を失ったスティーヴンをいつまでも「耶蘇会の怖い先生」呼ばわりするのか？

"His Mother is beastly (畜生のように／ひどい死に方) dead"はMとSで、beastlyの受け取り方が違う。

[母の思い出] ゆるゆるの茶色の絹帷子、端と紫檀の匂い、湿った灰の匂い、

H:「ぼくらイギリスでも、アイルランド人を不当な目にあわせてきた感じる。歴史に罪があるようだね」(U-Y 1.40)

根扇、房線の舞踏会カード、麝香の香、琥珀の数珠玉おもちゃ、鳥籠、怪傑タ

コウのお伽芝居、台所の蛇口から水をグラスに注ぐ姿、芯をくりぬいて黒砂糖を詰めたリング、虱を漬した赤く染った爪

「新しい異教主義」→世紀転換期における新しい"new"

「アイルランドをギリシャ化せよ」

ベーコン・エッグと紅茶、マリガンのナイフでスライスされたパン

Old Milk Woman

1クオート(2ペイント)=牛乳2シリング2ペンス；Sはポケットにもっている2ペンスを出さない。

計算能力と習慣的に身につけられた老婆の知性；牛乳2シリング2ペンス。

サンディコーヴミルクとハンロン店のミルク(第4挿話)の対応。ほんの一匙分の紅茶が入ると、ところどころミルクがすかにの濁る。"MIF" ⇌ 「ミルクを入れる前の紅茶の色」(TIF) (U-Y 4.117)

アイルランド語の衰退

「そんでわたしや恥しいんですよ、自分がしゃべれねえもんです。知ってる人に言わせる大層な言葉(a grand language)だそうで。」(U-Y 1.30)

フォーティ・フトでの海水浴へ(塔の外)

母なる海としてのダブリン湾／葡萄酒色の海にて

入浴者の男たち

太陽を覆う雲

1904年当時は、Forty Footでの遊泳は男性に限られていた。

A Young Man

An elderly man

Mulligan

A drowned man

[?] S「きみ(M)は溺れかけた人間を助けた男さ」→この男について後に詳細が分かるのか？

Mulliganの叔母

Ursula

鏡 マリガンの手鏡、「僕のひび割れた鏡」(アイルランド芸術の象徴)、「海面の鏡」

[?] 誰がマーテ口塔の家賃を払っているのか？

オムファロスー「アダムに臍があったのか？」神学論争  
cf. Philip Gosse,  
*Omphalos: An Attempt to Untie the Geological Knot*(1857)

オックスフォード大学モードリン学寮の追想

Oscar Wilde

「牛津若道」の描写？ シェイクスピア演劇

黒ミサの真似

超人思想

逆説

ランセットと銅鉄のペン

→スティーヴンの借金リスト (U-Y 2.60)

g.p.i

自由思想

Malachi/Buck Mulligan

Stephen Dedalus

Mは外見描写が豊富：ふくらかな体、頑丈ながっしりした体、淡いオーカーの木目色の髪(金髪(日の当たり方で変わる？)、金歯と白くきらめく歯並び、黄色いガウン、おさまりの悪いタイ、メルクリウスの帽子、ブーツ

ワイルドを思わせるふくらした体格？牡鹿のスマートイメージ？簫尊者？「脈絡のない男」？気まぐれな男？ぶれない行動原理をもつ人物？

バック・マリガンの演じる声の役柄：説教師の口調、年寄女の謙し声(グロウガン婆ちゃん)、よそゆきの声(学者風?)、たるんだおめでたいたわけ声、若い女の口調

Haines

チョッキ、テニスシャツ、グレーの中折れ帽、スカーフ

黒豹の悪夢

銀の煙草入れとニッケルのライター

アイルランド民話の収集  
—国立図書館での用事

[?] Hのアイルランド語の実力はどの程度？

[?] 支配者としての英国人が、アイルランドの文化にリストベクトルを寄せることがあるのか？；植民地主義的な態度が見え隠れているのではないか？

「ドイツ系ユダヤ人」に関するHの陰謀史観 (U-Y 1.41)

Hainesの父

ズールー族にヤラッバを売りつけ荒稼ぎ

母の死

白い陶器の器の縁のどろっとした胆汁

虱

W. B. Yeats, "Who goes with Fergus?"

臨終の折り

[?] 「苦痛が、いまだに愛の苦痛ではないそれが」→母への愛でない、母の苦しみに寄せる愛ではない苦痛だとすれば、一体何の苦痛？

トネリコのステッキ；詩人の象徴、スティーヴンの未来の予兆？；トネリコ=ash, 死を比喩している？

「ドイツ系ユダヤ人」に関するHの陰謀史観 (U-Y 1.41)

Hainesの父

ズールー族にヤラッバを売りつけ荒稼ぎ

→第4挿話のジョージ教会の弔鐘  
(スライド参照)

12時半に舟(シップ)で待ち合わせ

脱いた衣服とペニーコイン2枚(two pennies)

[?] 一枚目が服の山に潜り込み(Dressing)、二枚目はいったん潜った後に飛び出してきた(undressing)ということ？

郵便船(mailboat)

朝夕08:15/20:15に港を出発し(Gifford 15)、ダブリンとウェールズのホリーヘッド間を一日2往復する。

?

「磯近くと沖合で海面の鏡が軽やかな靴をはいて駆ける足に踏んづけられて白くなる」→「軽やかな靴をはいて駆ける足」とは誰、何のこと？

# 第1挿話の復習



# 第3挿話の復習

サンディマウントの磯、海風、足元の海藻や貝殻、波の音、濡れた砂、リーヒーの高台、船食虫に食い荒らされた船材、海落し卵、海捨て草、寄せる潮、色褪せたブーツ、産婆の?女性二人、男と女、泥砂、累々たる丸石、黒ビールの瓶、物干し綱、疊にされた二枚のシャツ、リングズエンド、舵取りや船頭の小屋、南岸壁沿いの積み重ねる石マンモスの頭蓋、丸石の防波堤、「菅やぬめぬめすべっこい昆布」、南中の太陽、トネリコのステッキ、ヒバマタ、ぶよっとむくんだ犬の骸、生きている犬 (Tatters) 、鷗、とり貝、「今はなき土木師たちの築いた石垣」、ビジョンハウス、堤防、ぎざぎざの岩、水中で揺れる海草、「一隻の無言の船」

ダブリン地図とサンディマウント周辺：キルケニー、聖カニス教会、ノー河畔のストロングボウ城、キッシュの灯台船、ブルーベック道路、リフィー川、サーペタイン通り、ハウス岬、リングズエンド、ビジョンハウス、ブラックピットのオラフリン酒場ファンバリー小路、ホッジス・フィギス書店、リーソン・パーク ダブリン湾口 フェザーベッド山、コック潟、シップ (酒場)

## サンディマウント周辺

陸地／海になる境界的な場所としての浜 (cf. 遠浅の海における境  
界のぼやけ ; "Am I walking into eternity?")

[?] スティーヴンはサンディマウントで何をしているのか?

## 死んだ犬 (carcass)

[?] 冒頭の記述に予告されている「死体」としての"in bodies"? ; Sは死骸 (carcass) としての貝殻を踏みつけている?

[?] Tattersは浜辺で死んでいる犬をどう認識しているのか。動物はどのように「死」を認識しているのか。

「...二本の前足がぱしゃぱしゃ引っ張いて掘る。何か埋めてるんだろよ、亡くなったお婆ちゃんでも。」

### メイ・デダラスの死去

"poor bitch's body"—"beastly dead"

その死は『肖像』と『ユリシーズ』の間に位置づけられている。1903年6月26日に埋葬。

"Lawn" Tennyson: ホッケーとの対応?

アルフレッド・テニソン (1809-1892) 『イン・メモリアルム』末尾の詩句

That God, which ever lives and loves,  
One God, one law, one element,  
And one far-off divine event,  
To which the whole creation moves.

オフィーリアの死体  
ハムレットの墓掘り人夫

埋める行為と埋葬されたものを掘り返す；死者を蘇らせるイメージ。

### 死者を媒介にした連想

#### メイデン岩沖での溺死事故

[?] 海 (羊水) のなかで揺られている溺死体には、まだ生きているイメージが付与されているのではないか?

「パンの、牧神の真昼」 (U-Y 3.92) ; 人間と動物の中間的な海神プロテウス；境界のぼやけ。  
「こけ犬わんちゃん」 (U-Y 3.88) ; 従属的な存在としての犬 (U-Y1.16)

砂州の上で鷗を追いかねながら変身する犬 (跳ね兎→牡鹿→熊→狼→子牛→犬→豹→禿鷹)

[!] 「海驢 (あしか) の波に吠えかかる」には "seamorse" に隠れた horse を馬偏として訳出しているのではないか?

Nacheinander (順次連続するもの) としての波  
whiteman—Mananaan—And and and and  
—Houyhnhnm

ホッケーのゴールが決まる  
ディージー校長「すべて人間の歴史は一つの大  
きな目標に向かって動くのです」 (U-Y 2.66)

### 女と男

"A woman and a man." (U 3.87) スティーヴンによって知覚された順番に語られる。  
→ "the ruffian and his strolling mort." (「やくざ者と辻君情婦」 U 3.89)

### 想像された発話1

#### グールディング家

リッチー叔父さん ブライト病

セアラ叔母さん

ウォルター

クリッシー

### 想像された発話2

「もしもし！こちらキンチ。エデン市へ繋いでよ。  
アレフ、アルファ、OOー」 (U-Y 3.74)

家庭で編み物をする女性の伝統的なイメージを利用した電話交換手の広告



cf. April Middeljans, "Weavers of Speech": Telephone Operators as Defiant Domestics in American Literature and Culture," *Journal of Modern Literature* (2010), vol. 33, no. 3, pp. 38-63.

創造行為としての鼻くそ展示  
→青つ湧の海 (snotgreen sea)

[?] 岩場での犬のマーキング行為と関連があるのではないか?

[?] 「手元の仕事をさっさとすませろ。」は何を意味しているのか

### パリの記憶

#### ケヴィン・イーガン

イカロス—鳥—鳩—Wild Geese の連想

「茶の子」とは何か?

# 第4挿話の言葉の地図

テーマ 登場人物 関連事項

- (1) 第1挿話との対比 (2) 「意識の流れから離れる事実」 (3) 『ユリシーズ』における「ユダヤ的」要素 (4) 植民地アイルランドと独立の問題 (6) ブルームの商い・貨幣経済に対する関心 (7) ブルームの身体的生理と排便の描写 (8) ブルームの動物に対する態度 (9) ブルーム家の生活空間におけるモノ (10) ブルームの科学的知識 (11) 市民生活とそこから疎外される存在 (12) 語りにおけるリズミカルな音や音韻の仕掛け (13) ホメリック・パラレル (14) 人間が食べるものの、猫が食べるものの (15) 輪廻転生のモチーフ (16) 1904年6月16日の天気 (17) 小説における糞尿・排便描写

## \*\*metempsychosis (柳瀬訳:「会者定離輪廻」)

→ "metepkheoses" (p.266)

## 排便・糞尿・排泄物

「雨が降らないと、いい卵はない」(p.103)

### 隣の家の鶏

庭に肥料（鶏の糞；牛の糞）をまいて、「豊穣」の地を考えるブルーム (p.122)

ブルーム、『ティッドピツ』誌を読みながら、排便をする：3段半（一段 (column) につき 1 ギニーの原稿料）の原稿量と排便量の対応；臓器による連関：ブルームの腎臓と排尿

## 手紙

ミリーからブルームへの手紙  
ボイランからモリーへの手紙

### 腰の曲がった老婆

ブルームの思念「不毛の地、何一つ生えない荒れ地」(p.110) の直後、アッパー・ドーセット通りの酒店キャシディの店から出てくる老婆；「荒廃」の主題とブルームの性的不安

## 1904年6月16日の天気

同一語句の反復による雲の描写と第1挿話との時間的対応：「雲が一つ、太陽をゆっくりと覆い始めた」→ (p.110) 「雲がゆっくり動いてすっぽり覆い」(p.21)；挿話中に挿入される天候描写の導入 (pp.101, 103, 104, 106, 108, 110, 111, 121, 124) → 「そろそろ洗濯物を外へ吊るす頃だが」(p.121)

### ホメリック・パラレル

サンダル履きの足で、俺を出迎える娘、金髪を髪になびかせて (p.111)

壁に掛けた「ニンフの湯浴み」の絵；(ギ)女神カリュブソーと囚われのブルーム

## 第1挿話との「対応」

ブルームとスティーヴンの対比；母親の肝臓とブルームの臓物好き；動物 (beast) に対する扱いの違い；スティーヴンは観念的・形而上のなもの、ブルームは身体的・日常的なものと、モリーは感覚的・肉感的なものと結びついている；スティーヴンが鍵を閉めることと、鍵を開めないブルームの対比→鍵をもっていない主人公のテーマ

### ハンロン牛乳店の配達人

### 郵便屋

### Molly (Marion) Bloom

男性器のイメージ→生殖・モリーのボイランとの情事；口を尖らせたボット；ミルクを注ぎ込む紅茶のボット

- 官能的なものへの関心
- Paul de Cockの本と名前
- ボイランからの手紙
- ベチコート；ヘアピン；ズロース

### Hugh Blazes Boylan

1889年の実際の作品をもとにしたサークスを舞台とした小説  
*Rudy, Pride of the Ring*

グレヴィル・アームズでのコンサート

### Banon

ミリーとピクニックの約束

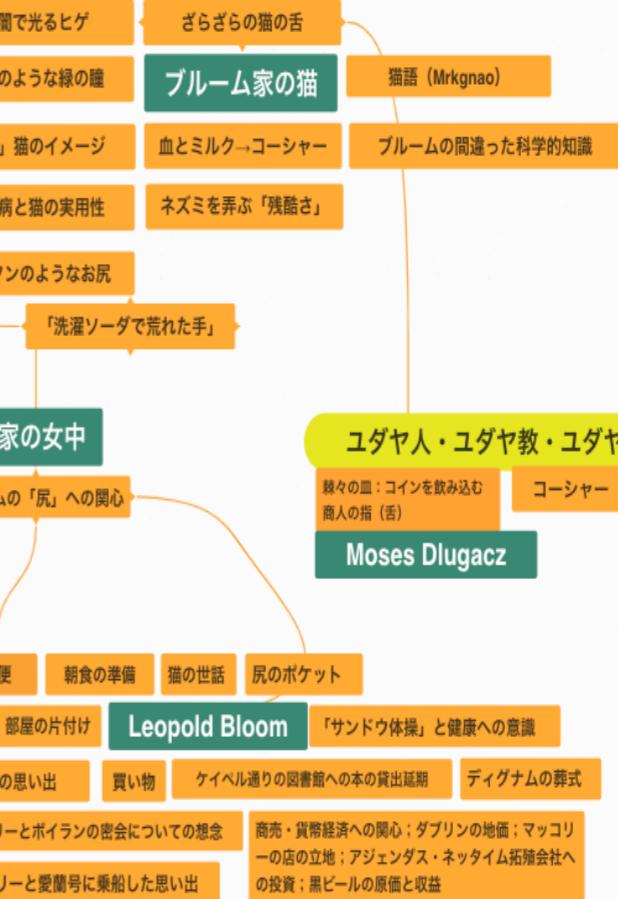
### Coghran

写真店オーナー

ブルームからベレー帽の誕生日プレゼントを受け取る

### Milly Bloom

ブルームとモリーの娘、15歳；6月15日生まれ；マリンガの写真店で勤務；週給12シリング6ペンス



## 第5挿話

テーマ

登場人物

関連事項

【ブルームの足取り】サー・ジョン・ロジャースン船寄通り→ワインミル小路→リークス亜麻仁加工所→海員宿泊所→ライム通り→ブレイディ路地→タウゼンド通り→救世軍会館→ニコルズ葬儀屋→ウェストラント通り→郵便局→プランズウィック通り→御者溜まり→カンバーランド通り・ミードの材木置き場→線路のガード下→教会→ウェストラント通り→スヴィニー薬局→トルコ風呂

花

Henry Flower (偽名)

サボテンの花、睡蓮、マーサの手紙の中の黄色い花、ビールの樽のなかの泡立つ、どろどろした「白泡の花びら」(U-Y. 3.93)、「一輪のものうげな漂う花」(U-Y 5. 152)

[?] 黄色の花は何の花だったのか? ; スイセン  
(narcissus) ? ; スミレ? ; 黄色のバラは嫉妬を表わす?

"Hammam. Turkish. Massage. ...  
Nicer if a nice girl did it."

[?] 浴場で体を洗ってくれるサービスはどのようなものであったのか?

水中花; 子宮のなかでたゆたう生の誕生のイメージ? ; ブルームの身体が花に擬せられている

レンスター通りの浴場

水を怖がるスティーヴンとは対照的に身体を水で清めるブルームの衛生観念; cf. 世纪転換期のダブリンの街路の不衛生な状態 (U-Y. 1. 29)

リンカン・プレイスのスヴィニー薬局 (U-Y 5.)



鎮痛芥子シロップ、クロロホルム麻酔

香

Rudolf Virag (viragはハンガリー語で「花」)

[?] トリカブトの花が想像されている?  
[?] ブルームの父の死はブルームの男性性の喪失につながっているのか?  
[?] ブルームの父が自殺したかは第5挿話からだけでは想定できない→「あんな死に方をして!」(U-Y 5.136)

髪油の匂い; 印刷したての新聞紙の匂い、ジンジャー・エール (芳香性)、馬尿の匂い、モリーの香水 ('スペインの肌') を知りたがるマーサ; 線香の匂い、教会石段の「聖なる石のひんやりする匂い」、「薬品のつーんと鼻を衝く匂い」、「海綿や糸瓜束子のほっこりっぽい匂い」、レモン石鹼の香り

パディー・デイグナムの死

L Leopold Bloom

帽子のヘッドバンドに書かれた "Plasto's high grade ha." における、消えた "t" の文字

リフィー側南岸

L

"Bethel. El, yes" ; "...Ale, Summer sale ; World-Word

ブルームの誤った自然科学に関する知識

(検屍官) M'Coy

メイデン沖での溺死事故

M'Coy: 誰が演奏会を仕立てているの? "Who is Getting it up?" ; 「誰のお膳立て?」← "Not up it" (U-Y 5.134)

子供と猫

広告

聖歌隊一当時、女性は聖歌隊に参加できない; カストラートへの言及→ブルームの性的不安

誤解・誤字・誤読

M Martha Clifford

タイプライターで書かれた手紙のなかの誤字 "I do not like that other world." (U 5.246)

皮剥ぎ手伝いの、煙草を吸う少年

広告

女郵便局長

郵便局

ピン

[?] keep it up (ずり落ちないように) の意味するものは?

Bantam Lyons

ブルームの「新聞を捨てる」(throw away)

アスコット競馬

という言葉を馬の名前として誤読する

黄ばんだ黒爪の指 (U-Y 5.150)

ブルームの父の死

息子ルーディーの死

スティーヴンの母の死

重層する誕生と死のイメージ

水

リフィー川、香水、(頭に乗せる) 水瓶、アルキメデスの原理、黒ビール、ジンジャーエール、葡萄酒、忘却の水、化粧水、風呂場の水

教会内での独白における "her" はマーサのこと? ; マーサは続く挿話で再登場するのか?

オール・ハローズ教会

酩酊と陶酔、酒と聖水 黒ビール、ジンジャーエール、葡萄酒、聖水

M Molly Bloom

(ブルーム家の黒猫)

プラムツリーの瓶詰め肉; "Incompet" が含意するものは? ; pot the meat はスラングで「性交する」の意。

香水・化粧水

棒状のもの

(Blazes Boylan)

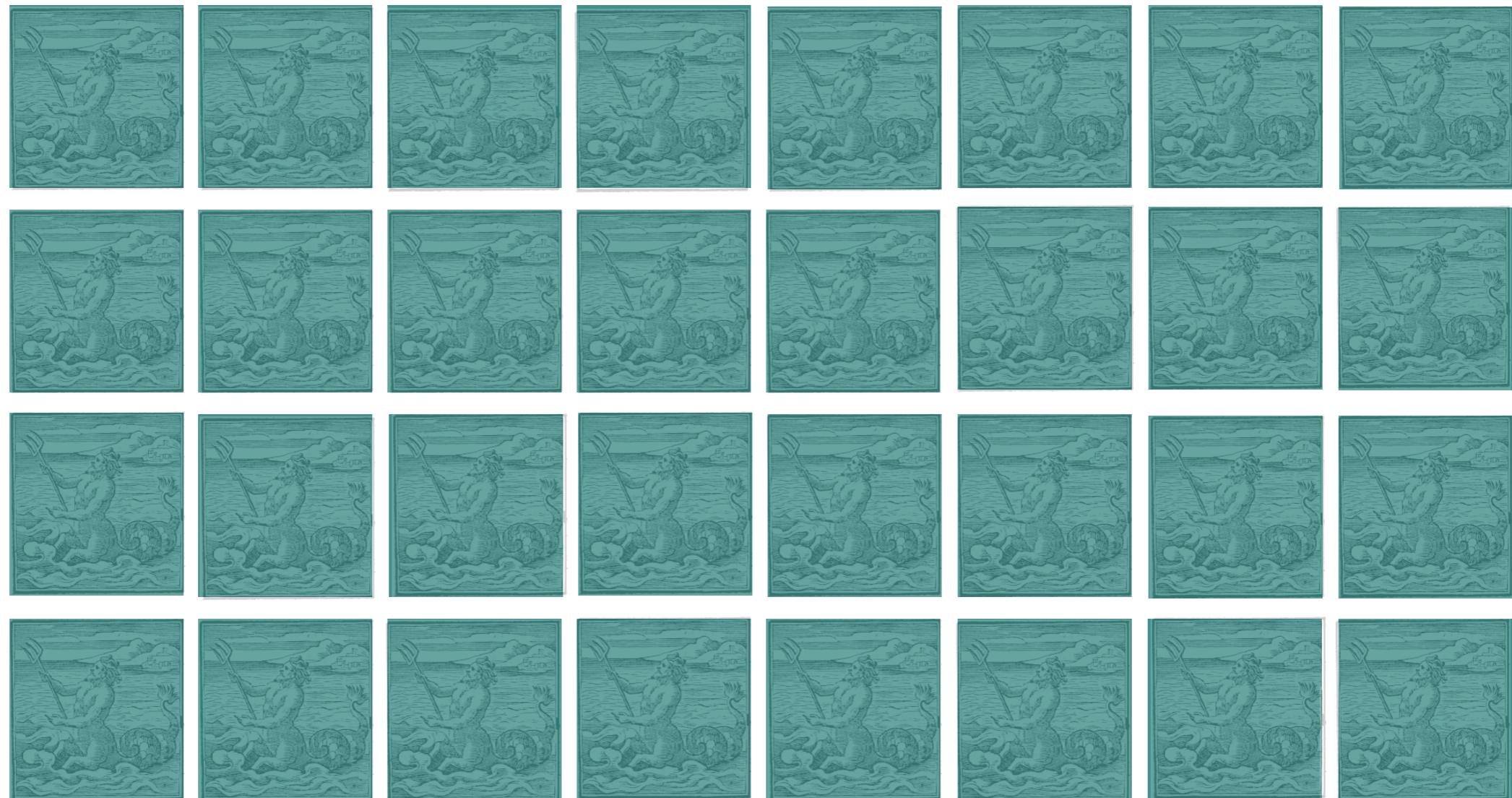
ボイランの男性器; I.N.R.I (Iron nails ran in.); Freeman's Journal紙のバトン、輻 (や) ; spoke spoke spoke ; 箸; クリケットのバット

M Milly Bloom

# 第5挿話の復習

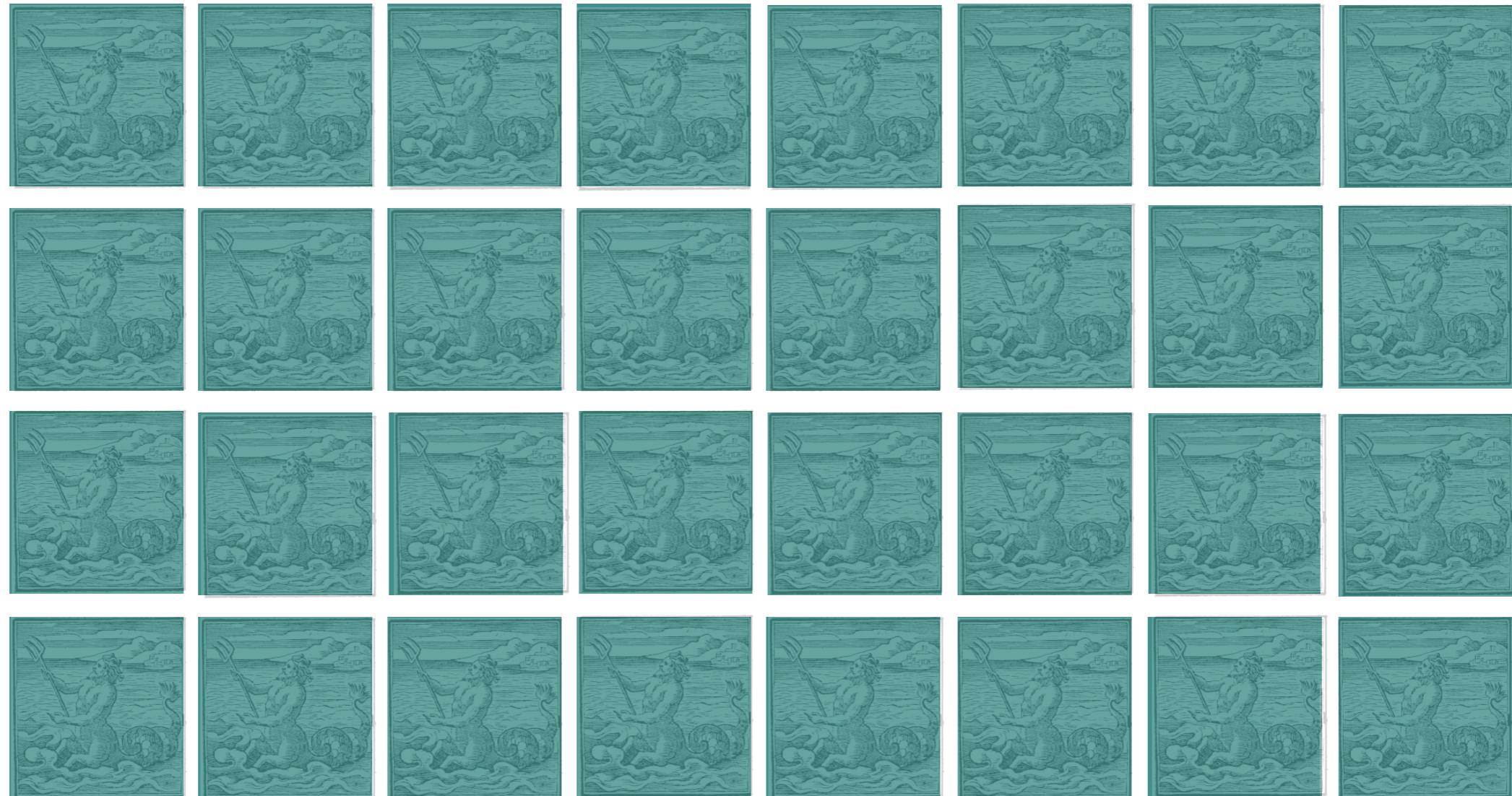
## 第6挿話の言葉の地図

## 『ユリシーズ』第1挿話 テレマコス



“ふんぞり返って、ふくらかなバック・マリガンが階段のてっぺんへ現れた。捧げ持つ石鹼の泡立つ丸い器にのせて、手鏡とカミソリが十文字に…” (U-Y 1. 11)

## 『ユリシーズ』第2挿話 ネストール



“一さあ、コクラン、なんという市が遣いを送った？” “一タレントウムです。”

“よろしい。それで？” “一戦争になりました。” “よろしい。どこで？” (U-Y 2. 49)

## 『ユリシーズ』第3挿話 プロテウス



“可視態の不可避の様式。少なくともそれ、それ以上ではないにしても、おれの目を通しての思考。万物の署名をおれはここで読み取る” (U-Y 3. 73)

## 『ユリシーズ』第4挿話 カリュプソー



“リアポウルド・ブルーム氏は禽獸の臓物をうまがる男である。どろっとしたもつがらスープもいいし、こりこりする砂肝、詰め物をして焼いた心臓…” (U-Y 1.11)

## 『ユリシーズ』第5挿話 食連人たち



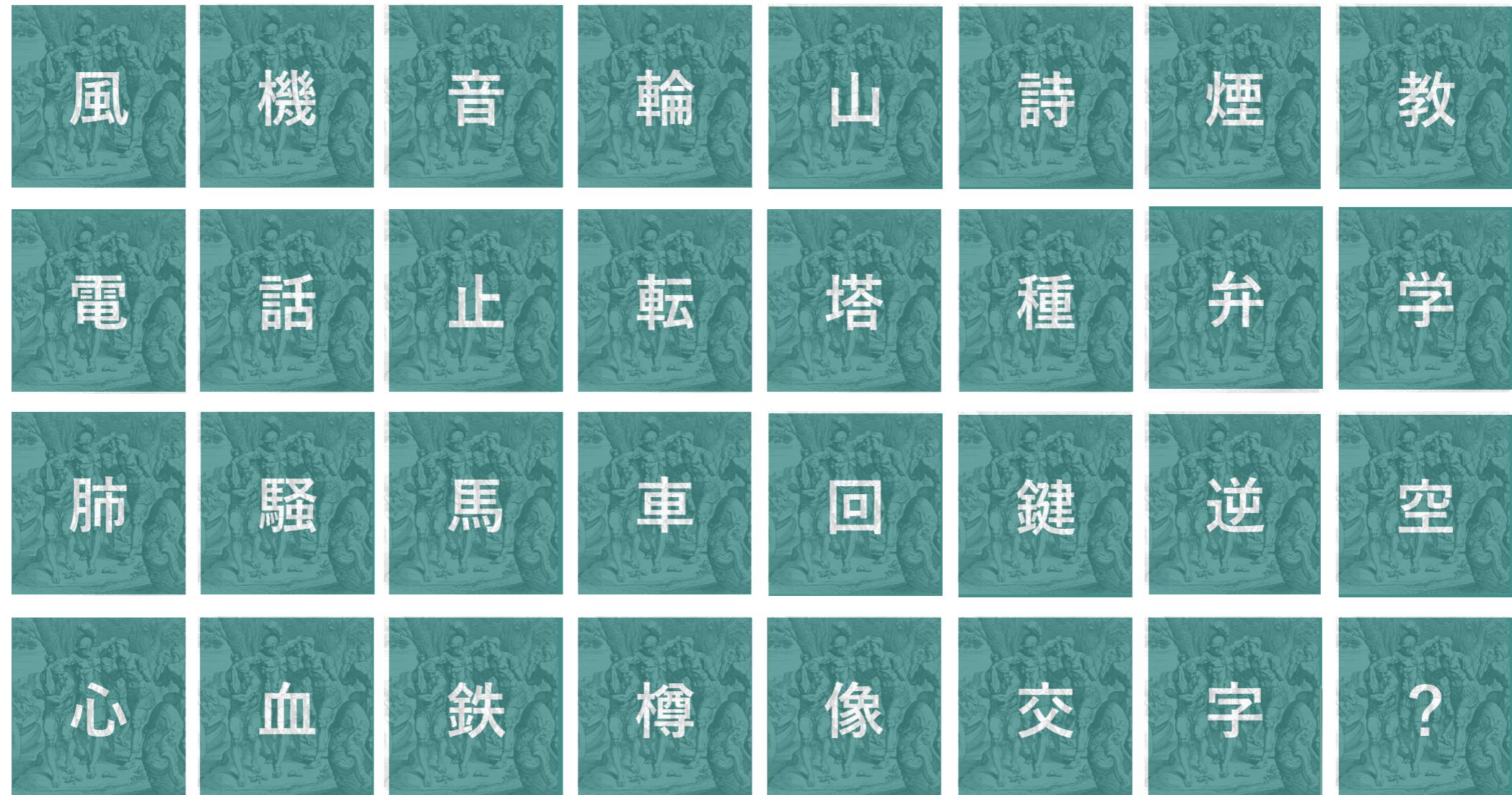
“荷台車の連なるサー・ジョン・ロジャースン船寄せ通りをブルーム氏は肅々と歩いた。  
ウィンドウミル小路を過ぎ、リークス亞麻仁加工所、郵便電報局を過ぎる…” (U-Y 5. 127)

## 『ユリシーズ』第6挿話 ハーデス



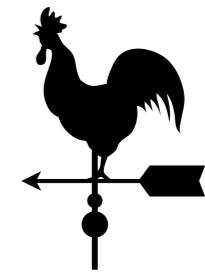
“マーティン・カニンガムが、まず先に、シルクハットの頭をギターと軋む馬車の中へ差し入れ、するりと乗り込んで席におさまった…” (U-Y 6. 155)

## 『ユリシーズ』第7挿話 アイオロス



“ネルソン記念柱の前で路面電車は徐行し、待避線に入り、トロリー・ポールの移動をすませ、そして発車する。ブラックロック、キングズタウン、ドーキー行き…” (U-Y 7. 203)

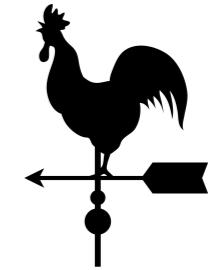
# 第7挿話 Aeolus



- 13:00-13:30 準備：Zoomの練習・操作案内
- 13:30-13:40 ご挨拶
- 13:40-14:40 第1部：風を起こす（主催者発表）
- 14:40-15:00 休憩
- 15:00-16:00 第2部：風を集める（読者参加型ディスカッション）
- 16:00-16:10 休憩
- 16:10-17:10 第3部：嵐を呼ぶ（読者参加型ディスカッション）
- 17:10-17:30 ご挨拶・次回読書会について
- 17:30～ オンライン懇親会

## なぜ第7挿話は面白くないのか？

- ① 連續性を分断する見出し・「司会」の不在
- ② 説明されない新出の人物や固有名詞
- ③ 延々とつづく内輪の話
- ④ 寸断される会話やエピソード
- ⑤ 回転しつづけるプロットを司る風見鳥
- ⑥ 面白いと思って話されている面白くない話

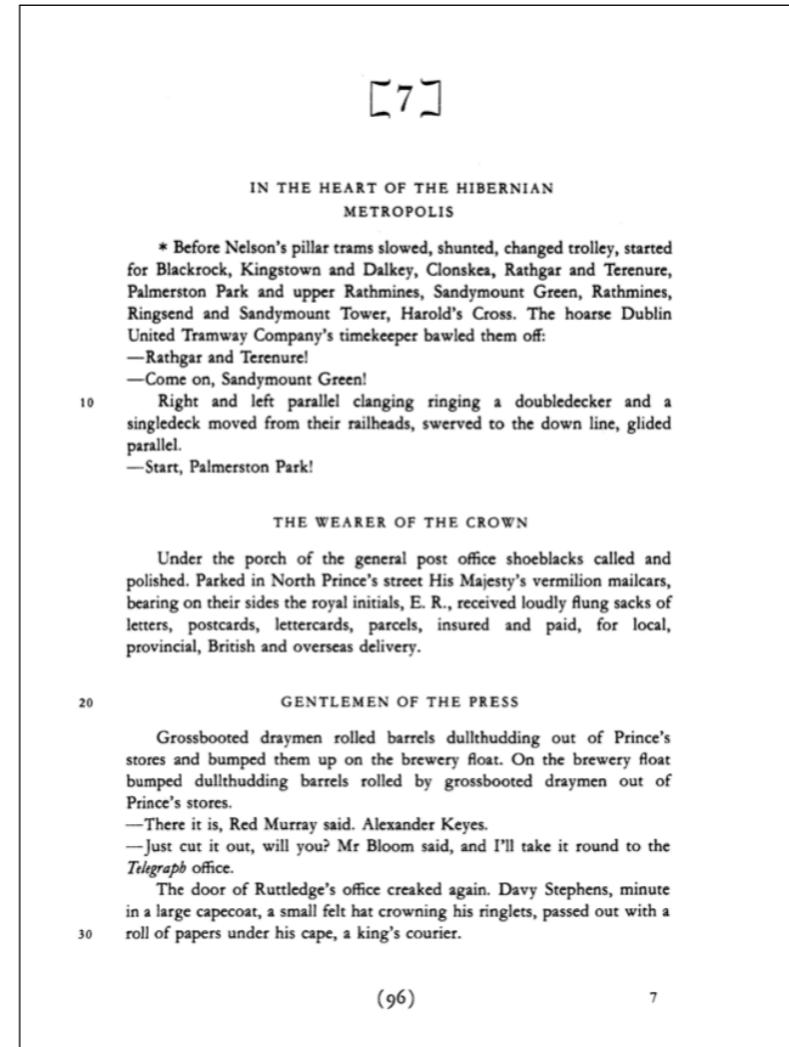
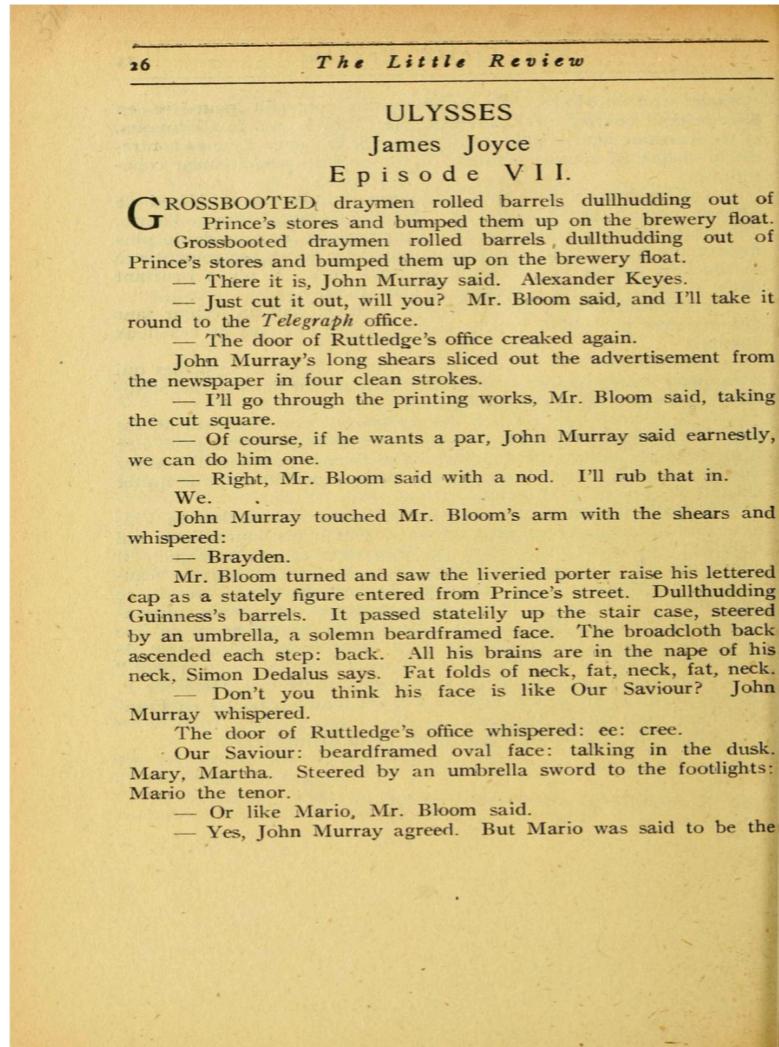


- ① → 隣り合う「記事」の隠れた繋がりを発見する
- ② → (実は) 既出の名詞や出来事、これまでの挿話との連続性を再確認する。
- ③ → 内情（歴史）を知ると同時に、修辞や運動性に目を向ける。
- ④ → 事がまっすぐ進む前提を捨てて、〈邪魔〉をプロットの転轍機と考える。
- ⑤ → 誰かを主人公に見立て、その主人公を中心に物語を編んでみる
- ⑥ → 「いまはまだ面白くない」だけ。個々の情報やエピソードは「意味の方向性」(\*) をもっている。

(※『ユリシーズ』における堆積する情報および「意味の方向性」については、金井嘉彦『ユリシーズの詩学』東信堂、248-49頁を参照。)

## ① 連續性を分断する見出し・「司会」の不在→隣り合う「記事」の隠れた繋がりを発見する

Jは『リトル・レビュー』紙1918年10月号掲載の初版版から1921年夏までに同挿話を大きく改稿。全体に各見出し(headlines)を振り、冒頭のトラムの騒音や「風」を表わすフレーズを多く書き込んだ。Jはこの改稿によって、意図的に物語の連續性を切断。



## ① 連續性を分断する見出し・「司会」の不在→隣り合う「記事」の隠れた繋がりを発見する

Karen Lawrence, The Odyssey of Style in Ulysses (1981), pp. 55-79より

- ❖ 第7挿話は物語が進行していく一方で、その物語を何度も中断するような見出しが現れる「二重書法」 (double writing) で書かれている。その見出しあは恣意的で曖昧、物語を不連続にするため、読者を困惑させる、〈邪魔〉 (interruption, intrusion, obstacle) として機能しており、後続する章の実験的な手法を予見させている。
- ❖ 見出しの「下」で進む「ミクロ・ナラティブ」 (“micro-narrative”) は基本的にそれまでの挿話に出てきた登場人物やプロットを発展させていく。3つの挿話でスティーヴンを扱い、もう3つの挿話でブルームを扱ったあと、第7挿話では別々の場所からスタートした二人の主人公がある一点においてcrossする。この二人の主人公のcrossingによって、第7挿話は『ユリシーズ』全体の物語の中盤が”新たに”始まったことを告げている。
- ❖ 散文の連續性は伝統的な小説の特徴であるが、第7挿話の見出しあは安定したナラティブの声の幻想を打ち碎く。また、「物語の展開という神話」をも破壊する。タイプグラフィカルな搅乱を通じて、誰が語っているかという「起源」と、物語が依って立つところの「展開」（プロット）という概念が揺さぶられる。
- ❖ 見出しのように強く文字を銘刻する特質 (inscriptive quality) は、言語の（外界に対応した）表現を行うミメティックな機能を掘り崩し、表象の道具としての言語の透明性を破壊してしまう（言語が言語としてtransparentなものではなく、obtrusiveなものになる）。こうして、どこからともなく現われる見出し群は、伝統的な小説がもっていた安定した領域にすかずかと入りこみ、一貫して何かを語る「自己」という概念を破壊してしまう。

## ②新出の人物や固有名詞→（実は）既出の名詞や出来事、これまでの挿話との連続性を再確認。

- |  |  |
|--|--|
| ❖ ネルソン記念柱 (U-Y 7.203, 249)                                     | → 「ネルソンの記念柱。」 (U-Y 6.167)  |
| ❖ キングスタウン (U-Y 7.203)  | → 「キングスタウンの港江をでていく郵便船を見渡す」 (U-Y 1.14)                                  |
| ❖ ドーキー (U-Y 7.203)   | → 「ヴァイコウ通り、ドーキー」 (U-Y 2.50)  |
| ❖ サンディマウント (U-Y 7.203)   | → 「こうしてサンディマウントの磯を果てしなく歩いていく？」 (U-Y 3.73)                              |
| ❖ リングズエンド (U-Y 7.203) 、  | → 「リングズエンド。潮焼けした舵取りや船頭たちの税小屋。人の住まう殻」 (U-Y 3.79)                        |
| ❖ 朱塗りの郵便車の頭文字E.R. (U-Y 7.204)                                  | → 「大英ダブリン歩兵隊。赤制服。ずいぶん派手…夜はオコノル通りに立ち入らせないように求めたモード・ゴーンの投書。」 (U-Y 5.130) |
| ❖ ギネスの酒樽 (U-Y 7.204)   | → 「千五百万樽（バレル）の黒ビール」 (U-Y 5.151)  |
| ❖ アレクサンダー・キーズ (U-Y 7.204)                                      | → 鍵：「鍵は持ってる？…デッダラスが持ってる」 (U-Y 1.25) 、「…表戸の鍵を探った」 (U-Y 4.104)           |
| ❖ ハインズとディグナムの葬式の記事 (U-Y 7.207)                                 | → 「ハインズがメモ帳に書きつけてる」 (U-Y 6.193)  |
| ❖ 墓地の鼠 (U-Y 7.207)   | → 「ころころ太った灰色の鼠が地下室の斜面を走り、…」 (U-Y 6.197)                                |
| ❖ 肉を包む新聞紙 (U-Y 7.210)  | → 「腎臓の包み」 (U-Y 4.112) ; 「血滲みのちらしをふわっと猫と落としてやり、」 (U-Y 4.113)            |
| ❖ ヴォーリオの発音 (U-Y 7.210)   | → 「行きたくていきたくなくて。発音を間違えずに歌うかな」 (U-Y 4.115)                              |
| ❖ 「ありがとさんか」 (U-Y 7.211)  | → [帽子の凹みを指摘されて、J・H・メントン「一ありがとよ、と、そっけなく言った。」 (U-Y 6.199)                |
| ❖ 「するるつ…どれもそれなりにしゃべってる」<br>(Everything speaks in its own way.) | → 「四語の波言葉」 (U-Y 3.93)  |
| ❖ テレグラフ (U-Y 7.212)  | → 「…同時に掲載してもらえば」 「テレグラフ。アイリッシュ・ホームステッド」 (U-Y 2.68)                     |
| ❖ ボールズブリッジ (U-Y 7.212)   | → 「鍵をじゃらじゃら。キーズの店の広告みたいだな…宛先はボールズブリッジと書いたっけな？マーサに…」 (U-Y 6.187)        |
| ❖ 水死体 (U-Y 7.213)  | → 「溺れ死にした男」 (U-Y 1.41)   |
| ❖ シトロン (U-Y 7.214)   | → 「シトロンのやつはまだ聖ケヴィン街に暮らしているのかな」 (U-Y 4.111)                             |
| ❖ レモン石鹼 (U-Y 7.214)  | → 「ブルーム氏は一個手にして鼻に近づけた。甘ったるいレモンのような蝋」 (U-Y 5.150)                       |
| ❖ 尻ポケット (U-Y 7.214)  | → 「ああ、あの石鹼。尻ポケットの中」 (U-Y 6.156; 176)                                   |
| ❖ 奥さんの香水 (U-Y 7.214)   | → 「奥さんがどんな香水使ってたか教えて。知りたいの」 (U-Y 5.138)                                |
| ❖ ネッド・ランバート  | → 「元気かい、サイモン？ ネッド・ランバートが柔らかく声をかけ、手を握る」 (U-Y 6.179)                     |

## ②新出の人物や固有名詞→（実は）既出の名詞や出来事、これまでの挿話との連続性を再確認。

- ❖ ダン・ドーソンの演説 (U-Y 7.215)
- ❖ グラスネヴィンのあの彫像 (U-Y 7.218)
- ❖ 金杯 (U-Y 7.222)
- ❖ ディージー校長の手紙 (U-Y 7.229)
- ❖ 口蹄疫・親牡牛派詩人 (U-Y 7.229)
- ❖ ワイルド・グース (U-Y 7.230)
- ❖ ギリシャ語 (U-Y 7.231)
- ❖ ピュロス (U-Y 7.231)
- ❖ 無敵党 (U-Y 7.234)
- ❖ ホロアン (U-Y 7.235)
- ❖ ラウンドタウン (U-Y 7.236)
- ❖ 「血みどろの歴史」 (U-Y 7.237)
- ❖ シーモア・ブッシュとチャイルズ (U-Y 7.240)
- ❖ シガレットケース (U-Y 7.241)
- ❖ ファンバリー小路・ブラックピツツ (U-Y 7.249)
- ❖ 貯金箱 (U-Y 7.249)
- ❖ プラム (U-Y 7.250)
- ❖ フローレンス・マッケイブ (U-Y 7.250)
- ❖ ルルドの水 (U-Y 7.250)
- ❖ アイリッシュタウン (U-Y 7.252)
- ❖ オコンル通り (U-Y 7.255)
- ❖ ジョン・グレイの像 (U-Y 7.257)

- 「ダン・ドースンの演説は読んだかね？」 (U-Y 6.161)
- 「たまに現れる白い像。像が数を増し、白い姿が木立にひしめき…」 (U-Y 6.176)
- 「アスコット。金杯。待て待て、バンタム・ライアンズはもごもご言う」 (U-Y 5.150)
- 「口蹄疫の件ですよ。ちょっと目を通してくれんかな。」 (U-Y 2.63)
- 「マリガンが新しい渾名をつけてくれるだろう。親牡牛派詩人」 (U-Y 2.69)
- 「パリのケヴィン・イーガン、雁（ワイルド・グース）の息子。」 (U-Y 3.80)
- 「おい、デッダラス。なんてギリシア人だぜ！…原文で読まなくちゃだめさ」 (U-Y 1.14)
- 「ピュロスの最期は？」 (U-Y 2.49)
- 「無敵党の仲間を裏切る証言をしたあの男もやっぱりこういう、ケアリーって…」 (U-Y 5.144)
- 「ゆうべ聞いたばかりなんだ。誰からだっけ。ホロアン。ピヨンピヨコの…」 (U-Y 5.131)
- (J・H・メントン) 「いつか（モリーと）ダンスをして、ラウンドタウンの…」 (U-Y 6.185)
- 「血糊傷にまみれた書」 (the gorescarred book) (U-Y 2.49)
- 「あそこがチャイルズの殺されたところだ」 (U-Y 6.175)
- 「ヘインズは足を止め、艶のある銀ケースを取り出した。」 (U-Y 1.39)
- 「情夫のほうはブラックピツツのオロックリンの店で…。ファムバリー小路での夜。」 (U-Y 3.89)
- 「これで三、ディージー校長は言い、小さな貯金箱を片手でくるりと回してみせる」 (U-Y 2.58)
- 「ネルソンの記念柱。／——プラムは八つで一ペニー！」 (U-Y 6.168)
- 「自由区から本日のお出まし。フロレンス・マッケイブ夫人…」 (U-Y 3.74)
- 「ルルドの靈験、忘却の水、ノック村の幻、血を流す像」 (U-Y 5.143)
- (パワー氏) 「どういう道を行くのかな？…」 「——アイリッシュタウンだ。」 (U-Y 6.156)
- 「大英ダブリン歩兵隊。**赤制服**。ずいぶん派手…夜はオコンル通りに立ち入らせないように求めたモード・ゴーンの投書。」 (U-Y 5.130)
- 「馬車はグレイの銅像を過ぎた。」 (U-Y 6.166)

### ③延々とつづく内輪の話→内情（歴史）を知ると同時に、修辞や運動性に目を向ける。

公共財としての言語に関心をもつスタイルは、第7挿話で目録的に用いられる約30にものぼる修辞用法にも見られる。この挿話は有る種の修辞法ハンドブックである。この挿話では、まるで言葉の練習をするかのように、修辞システムの部品を操作する振る舞いを見せ、その関心を、口にされた発話（パロール）から、「ラング」がもつリソースへとシフトさせていく。例えば“*They watched the knees, legs, boots vanish.*”は、カエサルの「來た、見た、勝った (*Veni, vidi, vici*)」の言葉に有名な、接続詞を省略する“asyndeton”である。この挿話では、この種の修辞的な用法が積み重ねられるように何度も使用されるうちに、言語の表層がその意味論的な機能を混乱させようとするのである。（Karen Lawrence, 1981, p. 67）

- (1) asyndeton : 接続詞省略
- (2) chiasmus — 交差配列法
- (3) anthimeria : 品詞転用
- (4) palindrome : 回文 : *Madam Molly*からの連想 → “*Madam, I'm Adam. And Able was I ere I saw Elba*”
- (5) 語挿入 : “insertion of a word in the midst of another word” found in “underdarkneath”
- (6) epithets : 通り名 “GENTLEMEN OF THE PRESS”
- (7) synecdochic pairs : 提喻 “THE CROZIER AND THE PEN”
- (8) metonymy : 換喻 “THE WEARER OF THE CROWN”
- (9) metaphor : 隠喻 “THE CALUMET OF PEACE”
- (10) literary and biblical allusions “THE GRANDEUR THAT WAS ROME,” “KYRIE ELEISON!”
- (11) coinages and neologism “DEAR DIRTY DUBLIN”
- (12) alliteration : 頭韻 “A POLISHED PERIOD,” “ERIN, GREEN GEM OF THE SILVER SEA,” “LENEHAN'S LIMERICK,” “THE GREAT GALLAHER,” “RHYMES AND REASONS”

### ③延々とつづく内輪の話→内情（歴史）を知ると同時に、修辞や運動性に目を向ける。

[Jが改稿時に加えた第7挿話冒頭の2つのシーン①]

- ❖ 「ネルソン記念柱の前で路面電車は徐行し、待避線に入り、トロリーポールの移動をすませ、そして発車する。ブラックロック、キングズタウン、ドーキー行き、クロンスキー、ラスガード、テレニュア、パーマーストン、パーク行き、アッパー・ラスマインズ、サンディマウント・グリーン、ラスマインズ、リングズエンド行き、サンディマウントタワー、ハロルズ・クロス行き（for）。嘆れ声のダブリン合同軌道会社発車係がとなり声で急き立てた。」（U-Y 7. 203）
- ❖ 「中央郵便局の玄関先で靴磨きが口々に呼び立て、靴磨きに精出す。北プリンス通りに並ぶ国王壁下の朱塗りの郵便車が、横腹に王の頭文字ERを見せて、どさっどさっと放り投げられる袋を次々に受け取る。封書、葉書、郵便書簡、小包、書留、料金支払済、市内、地方、英國本土、外国（for local, provincial, British and overseas delivery）。」（U-Y 7. 203）

→この2つのパッセージにある羅列を見るときには、その詳細な内実（ネルソン記念塔から実際に発車していた電車の時刻表やダブリン市の地誌的な知識）の知識はそれほど必要ない。代わりにその運動性（for）に目を向ける。電車や郵便物がある始点から四方八方に広がっていくように、つづく物語のなかでは、さまざまな事物や人物が個々に行き先の”for”をもつような運動性や方向性に従って、好き勝手に動く。さまざまな方向からの風が吹きあれるなかでは、（伝統的な小説がつくりあげてきたような）単一の語り手によってコントロールされる主筋は維持できない。それぞれの終点に向かう電車が固有の物語をもち、それぞれの宛先に向かう郵便物が固有の物語をもつ。読者はいつしか、とても整理することなどできない膨大なエネルギーに満ちて躍動する都市の生の只中に放り込まれている。私たちの日々の生活で歩む道は、私たち自身が發揮する「矢印」とともに、実は多くの「風」に吹かれて形成されている。→マッチ（241）

### ③延々とつづく内輪の話→内情（歴史）を知ると同時に、修辞や運動性に目を向ける。

[Jが改稿時に加えた第7挿話冒頭のシーン②：交差配列法 chiasmus：関連する2つの文や語に交差構造をもたせる修辞法で、反復性や往復性、合流を含意する。ABBA形式で考えるとわかりやすい。]

- ❖ どた靴の酒樽運びの馬方たちがプリンス通りの貯蔵所からごろんごろんと酒樽を転がして酒樽車へずしんずしんとのっける。酒樽車へどた靴の酒樽運びの馬方たちがプリンス通りの貯蔵所から転がしてきた酒樽がずしんずしんとのっかる。 (U-Y 7.204)
- ❖ Grossbooted draymen rolled barrels dullthudding out of Prince's stores and bumped them up on the brewery float.  
Grossbooted draymen rolled barrels dullthudding out of Prince's stores and bumped them up on the brewery float. (Little Review 1918 October版)  
↓
- ❖ Grossbooted draymen rolled barrels dullthudding out of Prince's stores and bumped them up on the brewery float. On the brewery float bumped dullthudding barrels rolled by grossbooted draymen out of Prince's stores. (U-Y 7.21)

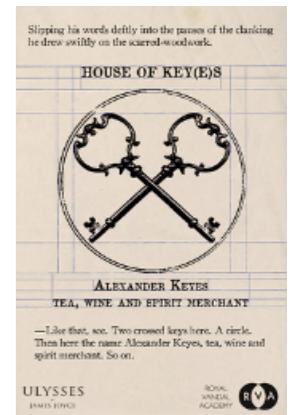


image: liberate Ulysses, “RVA Bloomsday print – Section 7, Keyes” <https://liberateulysses.wordpress.com/gallery/royalvandals/>

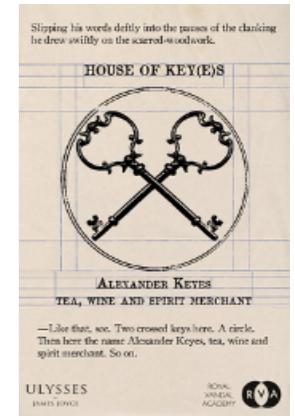
### ③延々とつづく内輪の話→内情（歴史）を知ると同時に、修辞や運動性に目を向ける。

[Jが改稿時に加えた第7挿話冒頭のシーン②：交差配列法 chiasmus：関連する2つの文や語に交差構造をもたせる修辞法で、反復性や往復性、合流を含意する。ABBA形式で考えるとわかりやすい。]

- ❖ どた靴の酒樽運びの馬方たちがプリンス通りの貯蔵所からごろんごろんと酒樽を転がして酒樽車へずしんずしんとのっける。酒樽車へとた靴の酒樽運びの馬方たちがプリンス通りの貯蔵所から転がしてきた酒樽がずしんずしんとのっかる。 (U-Y 7.204)
- ❖ Grossbooted draymen rolled barrels dullthudding out of Prince's stores and bumped them up on the brewery float.  
Grossbooted draymen rolled barrels dullthudding out of Prince's stores and bumped them up on the brewery float. (Little Review 1918 October版)  
↓
- ❖ Grossbooted draymen rolled barrels dullthudding out of Prince's stores and bumped them up on the brewery float. On the brewery float bumped dullthudding barrels rolled by grossbooted draymen out of Prince's stores. (U-Y 7.21)

#### Q. この冒頭の交差配列文の運動性に似たものは？

- (1) 電車の始点と終点を折り返す往復性
- (2) “Crossblind”やキーズ商店の交差する鍵の意匠：「鍵」をもたない主人公たちのcrossing。
- (3) ドアの開閉・「舞台空間」への人物の出入り：Way in. Way out. (U 7.51; U-Y 7.205)
- (4) 文字／活字の方向性：“mangiD kcirtaP.” “Madam, I'm Adam” (U 7.206)
- (5) この挿話全体の枠構造：ネルソン記念塔↔ネルソン記念塔



③延々とつづく内輪の話→内情（歴史）を知ると同時に、修辞や運動性に目を向ける。

Q. この文のなかに隠れている、反対から読むと、意味を成す文を探してみましょう。

He stayed in his walk to watch a typesetter neatly distributing type.  
Reads it backwards first. Quickly he does it. Must require some practice  
that. mangiD kcirtaP. Poor papa with his hagadah book, reading  
backwards with his finger to me. Pessach. Next year in Jerusalem. Dear, O  
dear! All that long business about that brought us out of the land of Egypt

③延々とつづく内輪の話→内情（歴史）を知ると同時に、修辞や運動性に目を向ける。

Q. この文のなかに隠れている、反対から読むと、意味を成す文を探してみましょう。

He stayed in his walk to watch a typesetter neatly distributing type.  
Reads it backwards first. Quickly he does it. Must require some practice  
that. mangiD kcirtaP. Poor papa with his hagadah book, reading  
backwards with his finger to me. Pessach. Next year in Jerusalem. Dear, O  
dear! All that long business about that brought us out of the land of Egypt

#### ④ 寸断される会話やエピソード（1）登場人物一覧

- ❖ レッド・マリー(204) 「赤毛のマリー」、本名ジョン・マリー。フリーマンズ・ジャーナル社の出納係。
- ❖ ジョーゼフ・ナネットティ(207) フリーマンズ・ジャーナル社の印刷所監督。
- ❖ ジョー・ハインズ(207) 本名ジョーゼフ・マカーシー・ハインズ。『イヴニング・テレグラフ』の記者で、ディグナムの葬儀参列者の報告記事を書く。
- ❖ マッキュー先生 (215) フリーマンズ・ジャーナル社の編集委員。ラテン語を教えているためか、揶揄的に「先生／教授」と呼ばれている。
- ❖ ネッド・ランバート(214) 本名エドワード・J・ランバート。副大法官チャタートンの甥で、穀物商店で働く。第6挿話にも登場。
- ❖ サイモン・デダラス(215) スティーヴンの父。第6挿話にも登場。
- ❖ J・J・オモロイ(217) 法廷弁護士。肺病を患っている。クローフォードに金を借りようとするが断られる。
- ❖ マイルズ・クローフォード(218) 『イヴニング・テレグラフ』の編集長。コーク出身で、アルコール中毒。スティーヴンに期待を懸けている。
- ❖ T・レネハン(218) フリーマンズ・ジャーナル社の週刊スポーツ紙『スポーツ』の記者。
- ❖ オマッドゥン・バーク(228) フリーマンズ・ジャーナル社の記者。

④ 寸断される会話やエピソード (2) →事がまっすぐ進む前提を捨てて〈邪魔〉をプロットの転轍機と考える。

---

→邪魔や中断、障害や侵入がどこにあるかに焦点を当てて、物語を見返す。

レッド・マリーとブルームの会話が電報配達人に割り込まれ、一時中断する (206)。Bはナネットィのもとに向かうが、先客でいたハインズ（ディグナムの訃報記事担当）にしばし待たされる (208) ハインズ、立ち去ろうとすると、Bが「ずっとたちふさがる」。借金返済のほのめかし (innuendo)。(208) B、ナネットィに話しかけるときに、輪転機の音に仕事を邪魔される (209)。B、電車でいったん家に戻ることを考えるが、やめておこうと考え直し (214)、電話をかけるために、イヴニング・テレグラフ編集室に向かう。編集室では、ネッド・ランバートがダン・ドーソンの講演文をデッダラス氏とマッキュー先生に読み上げている。ネッドが講演文の続きを読み上げようとすると、J.J.オモロイが入ってきて、一時中断。金策目当てにやってきたJ.J.オモロイは編集長に会おうとする。Bの内的独白に加えて、デッダラス氏とマッキュー先生の茶々によって、朗読は再三にわたって遮られる (215-19)。

ドアが乱暴に開かれてマイルズ・クロフォードが入ってくる。デッダラス氏とネッド・ランバートは隣の建物にある酒場オーバルに向かう。Bは隙を見て電話ブース (?) に入る。JJ.オモロイが「カナダの詐欺事件」についてマイルズに尋ねると、Bの電話の音が隙間に割りこんで、その会話を中断する (222)。オフィスの奥にいたレネハンがスポーツのゲラをおもってくるが、うるさい新聞売りの少年たちがやってきて、その風にゲラを落とされる。少年たちを追い出すと、JJ.オモロイがカナダ詐欺事件の記事を求めて新聞を開くが、長い記事のために、「六面四段目に続くか」として、段組みに邪魔される。キーズをつかまえようとするBは、受話器をおいて電話ブースを出ると、レネハンにぶつかって撲まえられる (p.223)。

#### ④ 寸断される会話やエピソード (3) →事がまっすぐ進む前提を捨てて〈邪魔〉をプロットの転轍機と考える。

Bはディロンにいるというキーズを求めて外出する旨を告げる。マイルズは、デッダラス氏とネッド・ランバートがオーバルに向かったと聞いて自分でも向かおうとするが、帽子を探してオフィスの後ろに消えていく。その間にJ.J./ オモロイがタバコすすめ、レネハンも一本をもらう。そこへ帽子をとってきたマイルズがやってきて、タバコを一本とる。レネハンが謎々を披露しようとしようするが、マッキュー先生のローマ文明論に遮られる。財務裁判所長官パリスの話をしようとすると、レネハンが割って入り謎々を披露しようとすると、そこにオマッドン・バーク氏とスティーヴンが入ってくる。レネハンが謎々を披露しようとして問いかけるが、そこにスティーヴンが割り込み、ディージー校長のタイプ原稿をマイルズに手渡す。 (pp.224-230)

マイルズが、アイルランド人が、オーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフでハンガリー人の暗殺者に襲われた話をしようとすると、マッキュー先生が割り込み、ローマ文明に対してギリシャ文明を持ち上げ、大英帝国およびアイルランドの文明をその2つの文明の子供に見立てる(231)。マイルズは「続きをあとで読もう」とディージー校長の原稿を読みのを一時中断するち、レネハンが謎々をふたたび提示し、その答えを得々と披露する。マイルズは口蹄疫問題をくだらないと断じ、スティーヴンに記者の可能性を告げる。イグネイシャス・ギャラハーのフィニクス殺人事件のスクープを例に出すと、オマッドン・バーク氏が事件時に御者の役割をになったSkin-the Goatのフィッツハリスがバット橋にいることを思い出し、ついてでに、ガムリーという石番がいることを思い出すと、スティーヴンが父の知り合いであるガムリーに食いつく。ガムリーに話をもっていかれそうになったクロフォードは再びフィニクス殺人事件のスクープに話を戻そうとする。しかし、バックナンバーの新聞を開いて図説付きで説明しようとすると、(Bからの) 電話の音が割り込む。マッキュー先生が対応し、その声がマイルズの説明の隙間から聞こえてくる。

#### ④ 寸断される会話やエピソード（4）→事がまっすぐ進む前提を捨てて〈邪魔〉をプロットの転轍機と考える。

ディロンから電話をかけてきたBだったが、編集長には「あんなもんは放っておけ」と取り次いでもらえず、編集室では話が続く。マイルズがブンヤ魂について一節を打っていると、電話を切ったマッキュー先生が無敵党の言葉にひっかかり、ある新聞記事を紹介しようとするが、それをJ.J.オモロイが横取りする（「エピソードの横取り」は第6挿話のルーベン・J・ドットの部分を参照）。マイルズはふたたびジャーナリズムの主題に引き戻そうする。主題はジャーナリストや弁護士の言葉の技芸である雄弁へと発展し、JJ.オモロイがチャイルズ殺人事件の弁護をしたシーモア・ブッシュの弁論例を引き合いに出す（この間、スティーヴンの意識が間隙を縫うように織り込まれる）。これに対抗してマッキュー先生が、アイルランド語の復興を論じたジョン・F・テイラーの論説をあげる。朗々と読み上げられる雄弁な演説の言葉のなかには、タバコの煙が、スティーヴンの意識が、「すきつ腹の言葉なき音」が割り込む。

演説が終わるとスティーヴンが酒場に行くことを提案する。マイルズが鍵を探しにオフィスへ戻ると、J.J.オモロイも後へ従う。スティーヴンとマッキュー先生は先に酒場へ向かうなかで、若き文学青年がプラムの逸話をマッキュー先生に話し出すと、新聞少年たちが駆け寄ってくる。マイルズとJ.J.オモロイが建物から出てきたタイミングを見て一行は酒場へ向かうが、そこにディロンから帰ってきたBがマイルズの前に立ちはだかる。Bは喧しく割り込んでくる新聞少年たちをどかしてからアレクサンダー・キーズ商店の件でマイルズに話しかけるが、すでに心は酒場に向かっているそのアル中の編集長に「腕で払いのけられるように」邪険に扱われる。

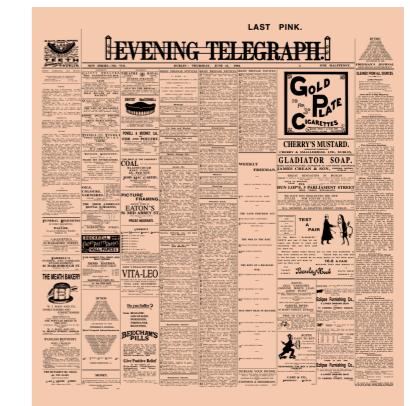
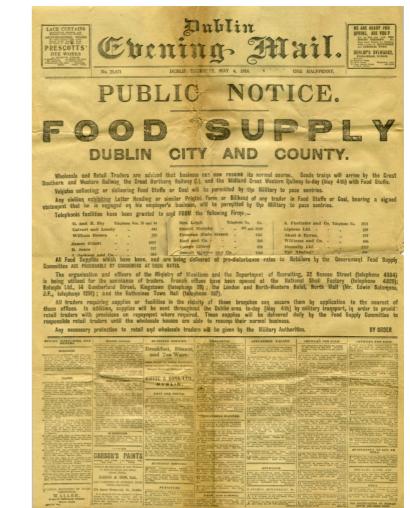
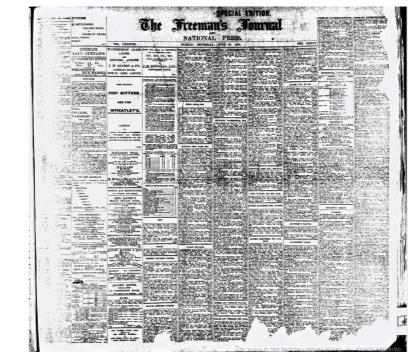
#### ④ 寸断される会話やエピソード (5) →事がまっすぐ進む前提を捨てて〈邪魔〉をプロットの転轍機と考える。

スティーヴンがマッキー先生にプラムの寓話の続きをはなしているところに、マイルズとJ.J.オモロイも加わる。スティーヴンが「スカートをたくしあげて…」と話を繋げると、マイルズが「検閲」に入って、一時言葉を止める。その後に老婆がプラムの種を吐き出した顛末を述べてエピソードを切り上げたときに、一行はムニーを反対に見据えるオコンル通りに差し掛かる。ここで8つの路線の路面電車が停滯し、機械の代わりに動物が、伝統的な馬を使った交通手段が活躍しはじめる。視点は物語のはじめに描き出した中央郵便局前へと引き戻され、フリーマンズ・ジャーナル社のオーナーにもなったジョン・グレイの像とネルソンの像が一つの視野に並べられることで、散らかって見えた第7挿話に枠構造がもたされる。

→第7挿話は「邪魔」をたどることが正しい順路。AからB地点に直線的に向かう運動はいずれも何かに阻害され、中断される。邪魔はある目的と方向性を持った人間には厄介なものだが、「邪魔から成る都市の迷路」は予期せぬ遭遇と他者を招く機構。

## ■『ユリシーズ』で言及されるアイルランドの主要・地方新聞、雑誌一覧

- ❖ Irish Independent (U 7. 308) 1890年代のパーネル派の新聞The Irish Daily Independent and Daily Nationを前身とし、1905年創立、ナショナリスト系新聞。1924年にFreeman Journalを吸収合併。
- ❖ Sport (U 7. 389) Freeman Journalが発行しているスポーツ新聞
- ❖ Freeman Journal (U 7. 443) Irで最も古い(1763年創刊)、ナショナリスト系新聞。1924年にIrish Independentに吸収。『ユリシーズ』ではレオポルド・ブルームが持ち歩く新聞。20世紀初頭の発行部数：約40000部 (O'Brien 60)
- ❖ Evening Telegraph (U 7. 232, 411, 666) 1871-1924発行：ナショナリスト系新聞。他の夕刊新聞紙Dublin Evening Mail, Evening Heraldと競合。20世紀初頭の発行部数：約26000 (O'Brien 60)
- ❖ National Press (U 7. 44) 1891-92発行：反パーネル派の新聞、1892年にWeekly Freemanに吸収。
- ❖ New York World (U 7. 636) 1860-1931発行：民主党系新聞、1931年にNew York World-Telegramに吸収される。
- ❖ Star (U 7. 687) 1788-1960発行：ロンドンで創立した、世界初の日刊夕刊新聞
- ❖ Paddy Kelly's Budget (U 7. 734) 1832-1835発行：ダブリンで発行されていた大衆娯楽紙(Thornton 122)
- ❖ Pue's Occurrences (U 7. 734) 17世紀に創刊したIr初期の新聞。
- ❖ The Skibbereen Eagle (U 7. 735) コークの街スキベリーンで発行されていた地方紙。大飢饉の主要被害地
- ❖ Irish Catholic (U 7. 964) 1888年創刊、ブロードシート判
- ❖ Dublin Penny Journal (U 7. 964) 1832-1836発行：Irの伝承や地誌を紹介する雑誌。ダブリンだけでなく世界各地の主要都市で販売された。  
→Hathi Trustによる全号デジタル・アーカイブ
- ❖ Kilkenny People (U 7. 975-76) Edward Thomas Keaneによって1893年に創刊；地方のナショナリストに人気、シン・フェイン支持  
【英國本土より、ユニオニスト系新聞】
- ❖ Daily Express (U 7. 307) 1900年にロンドンで創刊した、ユニオニスト系タブロイド新聞。Gabriel Conroyが記事を寄稿したため、ナショナリストのMiss Ivorsから“West Briton!”と詰められる。20世紀初頭の発行部数：約11000部 (O'Brien 60)
- ❖ Times 1785年創刊の世界最古の日刊新聞
- ❖ Irish Times (U 8. 324; 15.752; 16.911; 18.255) 1859年創立。20世紀初頭の発行部数：約45000部 (O'Brien 60)  
【その他】
- ❖ Irish Homestead 1895-1918発行：Irish Agricultural Organisation Societyの農業系記事を扱う週刊新聞。口蹄疫の関連からディージー校長が記事の掲載を希望 (U 2.412)。1905年からGeorge Russelが主幹編集を務める。Jに短編依頼を行い、1904年に“The Sisters”を掲載。
- ❖ Titbits 1881-1984発行：ブルームが自宅のトイレで読む娯楽雑誌 (U 4.467, 13.934; 16.1653)。
- ❖ Church Times (U 6. 945) 1863年創刊。英國国教会の新聞
- ❖ Irish Field (U 8. 339) 1870年に創刊した競馬新聞。
- ❖ Modern Society (U 17. 1802) 詳細不明
- ❖ The Nation 1844年創刊 (~49) 青年アイルランド党の週刊新聞
- ❖ Dublin Evening Mail 1823-1962発行：ユニオニスト・保守派の新聞で、グラッドストーンの政策や土地同盟に反対し、地主層の読者にアピールした。黄褐色の紙を使っている(ライバル紙のEvening Telegraphはピンク)。“The Painful Case”でMrs. Sinicoの死亡記事を掲載する“the buff Mail”として言及される。The Irish Timesが買収するが、1962年に廃刊。



# 第7挿話 Aeolus

- 13:00-13:30 準備：Zoomの練習・操作案内
- 13:30-13:40 ご挨拶
- 13:40-15:20 第1部：風を起こす（主催者発表）
- 15:20-15:35 休憩
- 15:35-16:15 第2部：風を集める（読者参加型ディスカッション）
- 16:15-16:25 休憩
- 16:25-17:20 第3部：嵐を呼ぶ（読者参加型ディスカッション）
- 17:20-17:30 ご挨拶・次回読書会について
- 17:30～ オンライン懇親会

# 第7挿話 Aeolus

- 13:00-13:30 準備：Zoomの練習・操作案内
- 13:30-13:40 ご挨拶
- 13:40-14:40 第1部：風を起こす（主催者発表）
- 14:40-15:00 休憩
- 15:00-16:00 第2部：風を集める（読者参加型ディスカッション）
- 16:00-16:10 休憩
- 16:10-17:10 第3部：嵐を呼ぶ（読者参加型ディスカッション）
- 17:10-17:30 ご挨拶・次回読書会について
- 17:30～ オンライン懇親会

次回の第8回読書会（第8挿話：ライストリュゴン人）は10月25日（日）にオンラインで実施します。具体的な日程と予約開始日はtwitter（@YMINAMITANI）とStephens Workshopのホームページでお知らせします。

よろしければ後ほど別途送付しますアンケートフォームにご記入いただき、workshop.stephens@gmail.comまでご返送ください。本日はご来場いただき、ありがとうございました。

